＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊（改ページ）

Ⅱ・朱夏から白秋へ

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊（改ページ

目次

構造改革派の頃　一九六五年の古いノートから
神奈川県庁へ、四四歳の転身　七五年四月
県庁で、折にふれて　七五年四月以降
「青年の船」で中国へ　七五年九月
日ソ知事会議（モスクワ、ボルゴグラード、レニングラード）七七年五月
アメリカ旅日記（国務省の招待を受けて）八二年五月
独バーデン・ビュルテンベルグ州へ姉妹提携交渉　八三年夏
与野党伯仲の頃　八三年十二月
ソ連自治体との交流を求めて　八四年十月
第二回世界非核自治体会議（スペイン・コルドバ）土井さん来訪　八五年～八六年
池子米軍家族住宅建設問題の調停案づくり　八七年春～秋
神奈川県副知事に選任される　八七年六月
文化交流の要請受けて東欧へ　八八年十月
メリーランド州との交流後、ペンタゴンへ　八九年十月
県庁退職し、日本初のサイエンスパーク社長就任　九一年七月
雑詠（娘二人早大卒、細川護熙氏より国政へ勧誘、義母臨死体験など）九二年一～六月
KSPへ両陛下を迎える　九二年七月二日
雑詠（俳句で日記）九二年七～十月
韓国趙大使親子の案内で雪岳山（ソラクサン）に登る　九二年十一月
墓参のため帰郷、富士参りなど　九二年十二月
佐藤昇さん死す　九三年三月二十日
義父母の介護・告別　九三年四月～九四年一月
人生の晩夏に入る－長洲知事引退、友のがん告知など　九四年三月～九七年四月
住居改築のため世田谷に転居　九七年五月
安東仁兵衛さん、がんに斃れる　九七年十月
弔詩　安仁に捧げる　九八年四月三十日
アジアサイエンスパーク協会（ASPA）の会長に推される　九八年十月
深大寺公園に遊ぶ　九八年十二月
長洲前知事七九歳で逝く　九九年五月

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

●「構造改革派」の頃―一九六五年十二月の古いノートから

一九五〇年代はじめ、私は中国問題の研究所から労働問題の研究所に移り、もっぱら労働経済論や労働運動論などの研究に従事していた。五〇年代末から六〇年代始めにかけて、社会党、共産党をまき込み、革新陣営を二分する形で「構造改革」論争(注)が展開されていたが、私は佐藤昇さん(評論家、岐阜経済大教授、故人)らとともに社会党の構革派のリーダー江田三郎グループの理論・政策集団（現代社会主義研究協会）にコミットし、理論誌『現代社会主義』の企画・編集などに参加していた。長洲さんも雑誌『現代の理論』の編集代表として既成革新理論の革新のための論陣を張っていた。

(注)五〇年代半ば、ソ連型社会主義と決別した西欧最大のイタリア共産党が提唱した先進国型の社会主義改革路線をめぐる論争。日本では社会党右派の江田三郎書記長が教条主義的左派路線を克服すべく日本型構革路線(モデルは欧州社会民主党)を提唱したが、党内闘争で左派に敗れて失脚した。

また、大学在学中に夭折した親友の妹で、私の郷里で小学校教員をしていた名和美子と結婚したため、東京・中野から東京通勤圏の茨城県取手町に居を移したところ、転居に協力してくれた高橋英典さん（東大経友会、第一次全学連初代書記長、のち朝日航洋社長、故人）によってしだいに町政にまき込まれることになった。高橋さんは東京での政治活動をやめて郷里にもどり、家業の織物工場を経営しながら町議をつとめ、さらに推されて町長選挙に出たが僅差で落選していた。その高橋さんに３か月間口説かれ、町会議員に立候補する羽目になった。

高橋さんのバックアップと地区労（教祖、全農林、全逓など）の支援で四九一票を獲得(高橋さんは毎回一二〇〇票を得てトップ当選)、定数三〇人中第八位で当選した(六四年二月)が、これを機に生活が一変した。社会党茨城県本部政務調査部長や北相馬支部書記長に推され、東京の研究所勤務のかたわら議会活動、党活動など自治体改革と社会党改革の一翼を末端で担いながら、東京―取手―水戸間を頻繁に往来し、超多忙の日々を送っていた（「Ｉ遥かなる青春」の詩「クリスマスイブ」参照）

しかし、結局、党内左派＝社会主義協会派との闘いは江田派＝構造改革派の全面敗北で終わり、江田氏の社会党追放とともに私も社会党を離れた。社会党を西欧型社会民主主義の党に変革しようとした構造改革派の挑戦は挫折し、日本における革新運動再生への胎動は圧殺され、その後の社会党の衰退、消滅、革新勢力の衰退、長期低迷につながった。

今日もまた政治論議に疲れ果て　実存の淵に心を癒す

実存の深みよりますます離れゆく　政治論議の空し哀しき

参謀は居れど指揮官なき集団　さりとてわれも指揮官にあらず

政治集団の参謀たるは難きかな　さらに難きは指揮官たること

評論と実践の間の深き溝　ため息ばかりで越える人なし

調子よき言葉を言うも実（じつ）のなき　人と知れる日心冷え込む

意気込んで発言終えしその後に　後悔の念苦水（にがみず）のごと湧く

駅頭に三百人が集いけり　わが街頭演説は朝六時半

夜遅く議会局長訪ねきて　明日の質問とりやめにせよと

会議終え利根の河原に降りたてば　月浩々(こうこう)と川面（かわも）きらめく

家貧しうても孝子出でざり何故ならん　社会党の病根かくも深きか

終電に遅れ早朝帰宅せば　玄関開け放しで妻ら寝めり

選挙戦要領覚えし幼子は　門前に立ちてビラを差し出す

こんなにも人なつこき人が大学者　われと酒場で政治を語る

（宇沢弘文東大教授と偶然隣り合う）

しらしらと霙（みぞれ）まじりの降る夜は　火を恋うごとく母恋うる夜

●神奈川県庁へ――四五歳の転身　七五年四月

横浜国大教授でNHKはじめマスコミにもしばしば登場し、人気学者だった長洲一二さんに、県知事選への出馬を説得したのが、当時横浜市長だった飛鳥田一雄さん。七四年夏のこと。長洲さんが迷っているとき「これは県民からの召集令状ですよ」と言って激励したことがある。そんな因縁もあって長洲さんが決断された後、県政の資料集め、政策作りなどを手伝った。一九七五年四月、長洲さんが知事選に大勝した直後、「一緒に県庁へ」との強い要請を受け、政策スタッフ（特別補佐官）として神奈川県庁に入った。

役所嫌いだった私が四四歳で、夢にも思わなかった地方公務員に転身した。連日超多忙、悪戦苦闘の日々で、「半年しか保たないだろう」「半年で辞めさせろ」というのが庁内外保守派の声だったようだが、その後一六年も仕え、副知事にもなったのは長洲さんの卓越した指導力のおかげだった。もう一つは取手町議四年間の地方自治体験だった。この体験がなかったら、おそらく県庁入りを引き受けなかったろうし、引き受けても一年も保（も）たなかったかもしれない。確かに「地方自治は民主主義の学校」である。

選挙終え慰労の言葉かけ合えば　「一緒に県庁へ」と知事に手握らるる

新緑に朝日まぶしき県庁に　両手かかげて長洲初登庁す

（本庁舎玄関前の広場に１０００人が集まった）

「先生を頼む」とわれの手を握り　目を潤ませる教え子助教授

（横浜国大岸本重陳さん、彼は長洲さんの立候補に反対だった。故人）

これがこれ大統領制なるか昨日まで　貧乏研究者が今日は知事の補佐官

副知事と総務部長に挨拶す　総務部長は敵意むきだし

県幹部霞が関出身者ばかりなり　これが果たして地方自治か

（副知事、主要部長、課長に国出身者がずらり）

知事とともに与党団会議廻れども　われのことなど一顧だになし

某党の幹部はわれを呼び止めて　にらんだあとで「議会はこわいぞ」

頻繁に飛鳥田(横浜)市長から電話あり　そのたびに言う「クボチャン　ガンバレ！」

（この電話で「久保さんは市長と電話で話せる人」とのハクが付いた。市長の配慮）

●「青年の船」で中国へ　七五年九月

各国青年との交流をめざす「青年の船」事業で、今回は中国が交流対象だった。青少年行政の責任者らとともに知事秘書として随行することとなり、四〇〇名の青年と横浜港から中国船「燿華号」で出港、一路上海へ向かった。私は初の訪中だった。

桟橋の声援にこたえブリッジに　昇ろうとするも押しもどされる

（ブリッジに上がれるのは課長以上と言われる）

兄たちが銃剣持って渡りたる　東シナ海友好のため航（ゆ）く

文革の毛沢東に失望す　人民公社の赤貧に声無し

（上海郊外の人民公社にて。文革末期で中国社会はどん底にあった）

農民の目は空ろなり農作業　生気失せたる人民公社

白菜の車引きゆく若者の　上半身に肋骨（あばらぼね）見ゆ（上海市内にて）

若者の目はかがやきて貧しさに　抗するがごと街角に佇つ

長城に登りてはるか青春を　想えば不意に胸熱くなる

（八達嶺にて。若き日、中国に志して東京外語大中国科に入学した）

●県庁で〜折にふれて　七五年四月以降

部長会議発言するは二人なり　いずれも国の派遣部長ら

辞令抱き数千人が群れなして　庁内外をかけめぐる異様

当分は関内（かんない）の酒場潤おわん　異動の季節街は華やぐ

（関内は横浜の都心、官庁、オフィス、商店、飲食店が並ぶ）

半年で一二〇〇人を接客し　外賓一〇〇人の表敬受ける知事

煙満ち熱気むんむん午前二時　知事査定いまようやく終わる

（長洲知事、財政危機の中で初めての予算編成に取り組む）

朝四時帰宅八時出勤　いつまで続く危機のなかの知事査定

夢と希望　語るが知事のつとめぞと　懸命にさぐる危機の脱出

財政の未曾有の危機に立ちむかう　知事の横顔　高僧のごと

大衆に手を振る知事と一人きり　書を読む知事のいと遠き距離

表彰状渡したあとに手を握り　一声かける知事を佳しとす

昼食の蕎麦屋に入り一人ずつ　握手でまわる知事のタフネス

わが仕事「知事語通訳」と言う人あり　「市民語通訳」とわれは思えり

（私の仕事の一つは、知事の考えを正確にラインに伝えること）

わが部屋（理事室）を「駆け込み寺」と言う人あり　必死の想いにこたえんと思う

（理事室には理事の私と、分野別のスタッフ数人が詰めていた）

わが部屋を「救命センター」と言う人あり　血だらけの課題運びこまれる

信大（信州大学）の教官公募に応募して　合格の報に知事室に走る

（長洲さんを知事１０年で国政へと思っていた私は、知事にその気なしと見て転身を図った）

信大に行きたしと知事に告げたれば　怒りてすぐに信大に電話す

（経済学部の公募に千人が応募し、四人合格。辞退で迷惑をかけた）

●日ソ知事会議（モスクワ、ボルゴグラード、レニングラード）七七年五月

奥田奈良県知事を団長に神奈川、埼玉、新潟、福井の五人の知事、北海道、青森、兵庫など四人の副知事で訪ソ、長洲知事の秘書として随行した。

独ソ戦血の川なりしボルガ河　いま静かにチョウザメ泳ぐ

（第２次大戦最大の激戦地、ソ軍１２０万、独軍８５万、市民５０万が死傷）

日本知事領土の話ばかりなり　ソ側白けて沈黙しきり

長洲知事にロシア語渡し二分スピーチ　ソ側みな起ち拍手喝采

（「ボルゴには涙、レニングには詩、モスにはドラマ、我らには友情」の趣旨を露語で）

私にもロシア語挨拶書いてくれ　いい来し知事はお医者さんなり

久保秘書は頭が高いぞと吾（あ）を責めし　某県副知事大蔵の人

（私の素性を知った後は副知事扱いにしてくれた）

●アメリカ旅日記（国務省の招待を受けて）八二年五月

すべて初体験の県庁生活のなかで、交際範囲が圧倒的に広がったのは何物にも替えがたいプラスだった。この間、アメリカ大使館のイマーマン参事官（後にコロンビア大学教授）とも知り合う。仲介者はPTTI（国際郵便電信電話労連）東京事務所長の初岡昌一郎さん（後に姫路独協大學教授）。おそらく二人の推薦があったからか、マンスフィールド駐日大使名でアメリカ国務省の招待を受け、一九八二年五月、「English poor」の回状をもって、東海岸から西海岸へ一ヶ月、行く先々でボランティアの助けをかりながら、アメリカ初体験の旅をした。その時のメモから判読できるものを採録する。

シアトルの入国管理官は童顔なり　ハブ・ア・グッド・トリップと言いて微笑む

シアトルの「タコマの富士」を眺めつつ　未知への旅のこころ調（ととの）う

モンタナの白銀の山脈（やま）飛びゆけば　若きマイクの働きし街

（招待状の署名者マイク・マンスフィールド大使は、若き日モンタナの鉱山で働いていた）

建国の高き理想を想いつつ　マウントバーノンの丘をさまよう

「家庭崩壊ノー　家庭変容イエス」と　リブの指導者静かに語る

米国の議会はかくもオープンなり　旅行者のわれを限なく案内す

コウォールは白系ロシアの娘なり　その微笑みはモナリザのごと

スーパーで豆腐　納豆買い込みて　自炊できるは良きホテルなり

反核のタウンミーテイングに出てみれば　政府代表もパネラーなりき

危険だと言われし夜の黒人街　一人歩めば子らが群がる（以上　ワシントンDC）

銀行へ一緒に走るオハートニク　夫は亡命ハンガリー人なりき

（両替の時間がなくなり困っていると、ボルチモア市国際ボランテイアのミセス・オハートニクが銀行に電話して時間外のOKをとり、一緒に走ってくれた）

肌の色と年齢層のミックスが　街の活気と市の黒人課長

米兵と日本人妻の娘キビキビと　市民運動のリーダーなりき（以上　ボルチモアで）

フィラデルフィアの駅で別れし留学生　柱のかげで目頭を拭く

ニューヨークは思いのほかの街なりき　あこがれ強き街なるせいか

地下鉄の落書き激し目を凝らし　このエネルギーの背後を想う

女神像カメラ向けても入らざり　アメリカ民主主義もかくのごときか

国連の庭に翻る万国旗　日の丸の旗やや元気なく見ゆ

（国連事務次長の明石康さんと面会、民際外交について意見交換）

マンハッタンのクラブサンドは美味なりき　友と静かにコーヒーする

（読売新聞を辞めてジョージタウン大に移っていた浅井信雄さんと）

ターバンのアラブの人が道尋ぬ　われは早くもアメリカ人なり（以上　ニューヨーク）

広大なリサーチパーク視察して　工業団地終われりと感ず

（リサーチトライアングルパークを見学。全米でPhDが一番多い地域とか。知識経済対応の産業政策、とくに「かながわサイエンスパーク」へのヒントを得た）

ノースカロライナの原生林に仰ぐ月　いまアメリカにわれは在るなり

（以上ローリー、ダーラム、チャペルヒルにて）

食前に手をとり祈る農場に　アーカンサの夕陽いま落ちんとす

（アーカンサ州リトルロック市郊外のウインロック・インタナショナルの農場を見学。農場で働く東欧移民のヘレン家にホームステイ）

東欧を捨てたるヘレン　アメリカにも　望み失せりと涙ぐみたり

山深きウインロックの山荘の　ベッドに入ればコヨーテの声近づく

（コヨーテはアメリカ狼）

お別れに抱擁すれば激やせヘレン　広き農場の苛酷さ想う（以上、リトルロックにて）

海べりのニューオーリーンズの落日は　忘れようにも忘れ難かり

（メキシコ湾に臨むフィッシャーマンズワーフで夕食。脱皮せる蟹のフライは美味なり）

満月のニューオーリーンズ一人行けば　フレンチクォータは若者の渦

（ニューオーリーンズにて）

灼熱の砂漠の街のフェニックス　人の造りし緑の尊さ

（街中の緑はすべて植樹、サボテンが目立つ）

忽然と母の名見ゆるアリゾナの　Osome レストランに飛込みしわれ

（十歳のとき死別した母の名がそめ、みんなに Osome—san と呼ばれていた　フェニックスにて）

娘よりおどけたる手紙届きし日　こころ浮き立ち T シャツを買う

UCLA に中国人学生多かりき　そのひたむきに行き交う迫力

（UCLA はカリフォルニア大ロサンゼルス校のこと）

盲（めし）いつつ日本人学生の世話をする　モース一家に光りあれかし

（モースさんはボランティアで日本人学生の世話をしていた。妻が日本人）

広大なスタンフォードに訪ね行き　エマースン教授に久闊を叙す

（氏の公使時代、知事との会談に何度か同席した。「考えるとき森の中を歩く」が印象的）

フーバー研はロシア資料の宝庫なり　ロシア革命のビラも所蔵す

桑港の夜景の美に魅されつつ　アメリカとの別れに胸熱くなる

（以上、サンフランシスコ）

●バーデン・ビュルテンベルグ州（ドイツ）へ姉妹提携交渉　八三年夏

八二年十一月、西ドイツ（当時）バーデンビュルテンベルグ州（以下 BW 州）より交流の申し入れがあり、翌年五月横浜で投資セミナーが開催されたりして交流への機運が高まった。そこで八三年夏、知事の名代として BW 州との交流について具体的に協議するためシュツッツガルトの州政府を訪問した。同行は秘書室折原(後に神奈川県東京事務所長)、商工部尾高（後に副知事）の両君、通訳はボン在住の政治学者・仲井斌君（神奈川県欧州事務所長、後に成蹊大、専修大教授)。同君の名通訳による高度なアシストのお陰で、無事使命を果たすことができた。

使命帯びボン空港に降りたちて　あごひげの友とひしと抱き合う

BW 州との友好提携進むらん　初顔合わせは上々の首尾

明くる日は経済省から首相府へ　ゲストのランク格上げとなる

首相府の書斎の間に招じられ　官房長官と会談二時間

（シュペート首相は南米出張中で官房長官との会談がセットされた）

「神奈川の頭脳センター　ベリグッド　直ちに輸入！」と盃挙げる経済相

（経済大臣は長洲知事の「頭脳センター構想」―神奈川を日本とアジアの科学技術のメッカにする、に共鳴、後に「構造政策」として採用）

山の端に月のハイデル（這い出る）ベルグかな（ハイデルベルグ見学　仲井君作）

アウトバーン飛ばして帰るボンの街　歓迎宴のドイツワイン佳し

ボンで見るお盆のような盆の月　にわかに恋しふる里の盆

レマン湖に噴水立ちて虹かかり　虹の彼方にアルプス霞む（ジュネーブにて）

●与野党伯仲のころ　八三年十二月

与野党の伯仲なりて真っ先に　君と喜び分かち合いたし

四年ぶりの伯仲なりてわが友ら　目を輝かしつつ往来激し

春に逝きし妻を偲んで涙する　君と年の瀬酒酌み交わす

来年は生き方変えん決意すと　決然と言い君は目を伏す

幼子を残して逝きし君が妻　われは無性に苛立ち覚ゆ

山道を二人子連れで登り行く　君を呼び止め夢から覚めぬ

満天の星を数えて凍ゆれど　母を想えばわが胸熱し

歩きつつサンドイッチを口で受く　若き仕草をわれもしたかり

●ソ連自治体との交流を求めて　八四年十月

長洲知事の命により、ソ連の自治体との友好提携の可能性を調査するため、知事秘書の蔵君、秘書室調査班の宮川さん、通訳の加藤始氏とともにモスクワ、ノボシビルスク、タシケント、オデッサ、レニングラードを訪問した。私は内心、県の「頭脳センター構想」を推進するためにも、シベリアの中心で、アカデムゴロドク（学術都市）のあるノボシビルスク州との提携を望んでいたが、州副知事から「海外との提携は州政府の任務とは考えていない」との頑なな態度を表明されて失望した(後に「再考したい」と言ってきたが、応じなかった)。

中央アジアのウズベック共和国タシケント州はつよく提携を望んでくれたが、某県との提携話が進行中で、神奈川がその気なら乗り換えてもいいといった雰囲気だったので敬遠した。黒海に面し古くからの自由貿易港を持つウクライナ共和国オデッサ州は官民一体の熱烈歓迎を展開してくれた上、神奈川の事情にも通じ、提携への熱意も真摯だったので好印象を持った。モスクワ、レニングラードはすでに提携先が多く、当方も関心が薄かったので表敬訪問程度に止めた。この結果、ウクライナ共和国オデッサ州を提携対象候補として知事に進言した。

十月のシベリアの気候厳しけり　粉雪舞いて摂氏二度なり

粉雪の舞い散るノボシビルスクの　教会で祈るアフガン行き兵士の母

（ソ連のアフガン侵攻は一九七九～八九。数万の犠牲者を出し、成果なく撤退）

北国の気候のごとく冷たかり　州副知事は交流を謝絶す（ノボシビルスク州政府にて）

シベリアの密林（タイガ）の中の学術都市　主な学者はモスクワに居ると

（学術都市の実態に失望。以上、ノボシビルスクにて）

「産みの親以外はすべて手に入る」　タシケントのバザール熱気溢れる

東西交流の広場で小石拾いきて　日付を入れて記念品とす

タシケントどてらのルーツ贈られて　その場で羽織り記念撮影

（タシケントは辺境の地と思ったが、中・南アジアへの交通の要衝）

夕食に羊の料理つぎつぎに　これぞ中央アジアの味か

タシケント日本人に似た人多し　亡き兄そっくりと街で出会えり（以上、タシケント）

オデッサは温かきかな我らをば　古き友人のごと熱くもてなす

オデッサ港わが県製の鋼管あり　遠くて近き経済のきずな

オデッサの「十月広場」で挨拶す　わがロシア語に三万人の拍手（以上、オデッサ）

ネヴァ河の水面（みのも）黒々寒々と　初冬の陽射し早くも衰う

朝霧のレニングラードの公園に　アンナのごとき女性佇つ見ゆ

独軍を破りし丘にわが植えし　記念樹高く十七年流る（以上、レニングラード）

＜追加＞国際ビエンナーレ児童画展のためオデッサに行く　九十年五月

オデッサの空港に降りて赤絨毯　踏みしめ行けば歓迎の人波

オデッサの歓迎の夕べは楽しかり　歌あり劇ありダンスもありて

小学生日本の歌を合唱す　われ駈け寄りてリーダーと握手

われもまた歓迎にこたえ朗々と　ウクライナ民謡歌いきったり

●第二回世界非核自治体会議（スペイン・コルドバ）、土井さん来訪　八五～八六年

米ソ対決による核戦争への危機感から欧州先頭に非核自治体宣言、非武装都市宣言をする自治体が広がった。神奈川県でも八四年七月「神奈川非核兵器県宣言」が成立した。これを受けて「第二回世界非核自治体会議」（第一回は八四年三月マンチェスター）に神奈川県代表として参加するため、スペインの古都コルドバに向かう。基地対策課長森君が同行。会議では基調講演を行い、議長団に入る。会議の合間にトレド、アルハンブラを訪ねる。帰途、ロンドンに立ち寄り、反核ラリーに遭遇。市長に表敬し、副市長と懇談。土井たか子さん来訪し突然の発言。

マドリード空港に着けば女子学生　「久保さんですね」と小走りて来る

（通訳を頼んだ彼女は東京外語大スペイン語科の学生で留学中）

「時間ありトレドはいかが」と勧める彼女　元気を出してタクシーに乗る

タクシーの運転士は王党派　ゴンザレス首相を激しく罵る

（革ジャンを着た若き首相、社会民主労働党書記長）

初めてのトレドの街の静寂に　われ佇ちおれば中世の幻影

中庭に言葉を無くし佇めば　限りなく青しアルハンブラの空

核兵器へ断罪激し「核の冬」　論じて熱す物理学者は

「海の核」指摘しつよく日本に　役割迫るポリネシア代表

欧州の反核の強さ激しさに　気後れしつつ議長席に着く

コルドバの市長招宴は午後八時　星空のもと野外パーティー

中世の騎士の服装した男　テーブル回りワインをそそぐ

カルメンの如き女がフラメンコ　激しく踊り夜も更けわたる

ロンドンの反核ラリー五〇万　家族ぐるみが街頭埋める

緑なすグリーナムコモン訪ねれば　ヒューマンチェーンで基地囲む人びと

ロンドンの副市長は大男　「非核で連携」と吾（あ）を抱きしめる

（非核宣言したロンドンは、市長を長らく労働党が占める）

「久保さんを下さい」と迫る土井たか子　知事は仰天われは動転

（初の女性社会党首となり、挨拶に見えた土井さん、突然の発言、知事は謝絶、協力を約す）

●池子・米軍家族住宅建設問題の調停案づくり　八七年春～秋

国が逗子市池子弾薬庫跡地に米軍家族住宅建設を計画（八三年）、住民の激しい反対運動が起き、市長選で反対派の冨野暉一郎氏が当選（八四年）。事態が混迷するなか国、市が知事に調停を依頼。私が知事の特命を受け、冨野市長、宍倉防衛施設庁長官との間で調停案作りに奔走した（八七年春から秋）。この間、伊東正義自民党政調会長、栗原防衛庁長官にも協力を得るため何度か面談したが、関係者すべて、とくに伊東正義さんには人間的に深く共感するものがあった。

長官の「窮すれば変ず」のコメントに　打開の道ありと知事室に走る

（朝刊に出た栗原長官のインタビュー記事を読んで）

池子問題の特命受けて六本木　百回近く往復したり

（防衛庁、同施設庁は六本木にあった）

防衛庁の守衛もわれを覚えたり　挙手の礼して施設庁指差す

恐縮し会長室に入り行けば　「久保ちゃん　こっちへ」と伊東会長

（自民党政調会長室に伊東正義さんを訪ねる。その温かさにホッとする）

長官の電話に驚きわが妻は　受話器に最敬礼しわれに渡せり

（栗原長官は出勤の途次、車からしばしば電話を入れてくれた）

調停案決裂寸前の知事公舎　庭の木立に夕闇迫る

会長の寸暇を得んと郡山　帰路の車中に面会求む（選挙区に帰った伊東会長を追っかける）

長官　会長　市長　知事　調停案書きつつ浮かぶ顔顔

国は受諾市は持ち帰り拒絶せり　われは直ちに辞表を提出

決断なき人との交渉徒労なり　われ放心しソファーに沈む

●神奈川県副知事に選任さる　八七年六月

私はあまり乗り気でなかったが、私を副知事に昇格させるのが長洲知事の悲願だった。しかし後継者問題も絡み、保守派と共産党が激しく反発し、二度流産した。周到な根回しの上三度目の提案でようやく可決した。第三副知事として企画、県民、環境、渉外の四部を担当。「かながわサイエンスパーク」建設は担当外だが、特命で担当した。

七〇対四〇にて可決せり　わが副知事の三度目の提案

（賛成は社会、公明、民社、県政会。反対は自民、共産）

副知事はそんなに偉いのか各所より　祝辞祝電しきりに届く

外からのスタッフ職が副知事に　史上初めてと新聞は書く

秘書二人付きて別室に移動せり　副知事室はばかでかき部屋

何気なく電話を取れば外語学長　中国科の恩師我を祝えり

●文化交流の要請受けて東欧へ　八八年十月～十一月

東ドイツ、チェコスロバキア、ハンガリー三国の文化省から神奈川県立県民ホールと交流強化を図りたいとの趣旨で、文化担当副知事宛て招待状が届いた。知事と協議の結果、これを受けることとし、県民ホールの川口、文化室の西森両君とともに、私が責任者になり、八八年秋、東ベルリン、西ベルリン、ドレスデン、プラハ、ブラチスラバ、ブダペストを訪れた。３国の文化省大臣または副大臣、プラハ市長などを表敬、各都市のオペラハウスの責任者と今後の交流について懇談を重ねた。音響効果はもとより、山下公園、中華街などの周辺環境を含め、県民ホールへの評価が予想外に高かったのが印象的だった。厳しい検問を体験したベルリンの壁が一年後に崩壊したことも記憶に生々しい。

東独に招ばれて飛びしベルリンは　ロンドン経由でしか入れず

ベルリンの壁を見上げてこの異常　壊れるときはいつ訪れるらん

ベルリンの壁をくぐりて西東　往き来をするは緊張の連続

東西のベルリンオペラお互いに　相手をくさし欧州一誇る

東西のベルリン比べ「豊饒」と　「清貧」の差鮮やかに迫る

プロイセンからザクセンに入るやかの青年　急にはしゃぎて饒舌となる

（プロイセン州の東ベルリンで東独文化省に勤めるこの青年は、ザクセン州ドレスデン出身でプロイセン嫌いだった）

欧州のヒロシマと言われしドレスデン　廃墟の記念碑に粛然と立つ

東独からチェコに入るや長停車　パスポート点検に一時間半

車窓からのネッカー河の風景は　セピアに染まりて心に焼きつく

プラハの駅に出迎う文化省　通訳未着で無言で微笑む

出迎え者英語通ぜず困り果て　ロシア語話せば小躍りする彼

（プラハ駅で。チェコの文化省の役人はモスクワ大学留学者だった）

ブルタヴァ（モルダウ）のカレル橋からプラハ城　いつまで見ても飽きざる眺め

プラハは塔の街なり見晴るかす　果て無き空に塔の林立

ホテルからかすかに見ゆる白い帯　音に聞こえしドナウの流れ（ブラチスラバにて）

朝霧のハンガリー平原走り行けば　樹氷の林限りなくつづく

トラックの長蛇の列の先見れば　検問所の前であくびする人びと

ブダペストわれの泊まりしこの部屋は　北鮮人（びと）の定宿の隣

●メリーランド州との交流後ペンタゴンへ　八九年十月
ーメリーランド大学で感動的体験をしたー

神奈川県の姉妹州であるメリーランド州との定期交流のため、アナポリスの州政府を訪問、シェーファー知事を表敬した後、経済省や近隣の市や町の代表と交流。チェサピーク湾のクルージングが忘れ難い。高橋国際交流課長らが同行。

メリーランド大学にも案内され、図書館にあるプランゲ・コレクションを見学したが、ここで感動的な出会いがあった。このコレクションは占領下日本のあらゆる出版物を検閲していたGHQ検閲部の責任者だったプランゲ大佐が、検閲のため提出された出版物を占領終了後、大佐の母校である同大學図書館に寄贈したもので、ボロボロになりつつある資料の保存について協力を求められていた。

私は最初の就職先である中国研究所時代、「アジア経済旬報」、「中国研究月報」などの定期刊行物を東京中央郵便局にあったGHQ検閲部に提出する仕事もしたことがあるので、早速検索してもらったところ「中国研究月報」のコピーを五冊分用意してくれた。このガリ版刷りの雑誌を手にしたとき、往時を想い感無量だった。帰途、ワシントンに回り、国務省、国防省を訪問、神奈川の基地問題について要請活動を行った。（このコピーは後に中国研究所に寄贈した）

州庁舎にシェーファー知事を表敬す　端正なる接見室わが県にも欲し

チェサピーク湾夕陽を浴びてきらめけり　ガバナーズボートのクルージング佳し

アナポリス女性海兵逞しく　かけ声高くボート漕ぎゆく

チェサピークは海幸の宝庫なりロブスターなど　たらふく食らい杯を重ねる

GHQにわれの運びし『中国研究月報』　コピー受け取り感慨深し

（1950－51年頃検閲部に度々出頭し、顔の見えぬ窓口で刊行物を手渡した）

検閲部「発禁」のスタンプ押されたる　毛深き腕を今も忘れず

国務省ジャパンスクールに囲まれて　日米関係のセミナーのごと

基地問題で初めて訪ねしペンタゴン　パウエル・ジュニアが玄関に待つ

（パウエル国防長官の子息、下士官だった）

ペンタゴン迷路のような通路をば　すいすいと行くパウエル・ジュニア

次官補は眼光鋭く吾を見つめ　八割拒否し二割受容す

（厚木基地の夜間訓練の騒音被害、横須賀基地の原子力艦船の安全性について抗議と要請）

●県を退職し、日本初のサイエンスパーク社長へ　九一年七月

五選目の知事選に圧勝した直後の五月、「知事がお呼びです」との連絡で知事室に行くと「五期目は長洲県政の総仕上げになる。一番気になるのは《神奈川サイエンスパーク》だ。四年になるが期待の成果が出ていない。名誉職社長でなく、実務もできる常勤社長が必要だ。久保君にお願いしたいのだが・・」との話だった。一瞬戸惑ったが「長洲県政の最重要事業で、コンセプト段階からかかわってきたので逃げる気はありませんが、会社経営の経験はゼロですから、＜命令＞なら受けますが、＜考えてくれ＞ならお断りします」と答えた。

知事はすかさず「命令です」と言われた。九一年六月二日、私は副知事を退任し、三週間休養の後二十三日、株主総会の議を経て日本初の「かながわサイエンスパーク」の運営会社（株）ケイエスピー（県、川崎、国で十五億円、民間企業三十億円出資の第三セクター）代表取締役社長に就任。「研究開発型企業が生まれ、育ち、集う」イノベーションセンターの運営という未知への旅に出た。

日本初のサイエンスパーク立ち上げん　蒼天を衝くビル群に誓う

アイデアから建設へ幾夜重ねしかこの事業　瞼に浮かぶ関係者らの顔

限りなき頭脳資源の開発に　国運かかると岡崎会長

（全日空会長だった岡崎嘉平太さんが初代社長に就任された）

神奈川をアジアの「頭脳センター」へ　長洲知事また決意を語る

●雑詠　娘二人早大卒、細川護熙さんより国政勧誘、義母臨死体験など　九二年一～六月

お地蔵に　ひれ伏す老女　霧ふかし（日吉・鯛ヶ崎公園にて）

お神酒干し　すべては運命と断ず　卆寿翁（義母退院の日、義父と缶ビールで新年を賀す）

義母（はは）卆寿　ゲートボールに　春陽さす

卒業し　稲門に立つ　吾子二人（九二年三月二五日、長女・文、次女・政経を卒）

卒業に　蕾も固く　華やげず（お堀端のフェアモントホテルで夕食、桜は一分咲き、慶びも一分咲き）

花の下　還暦過ぎし　腕を組む（高田東公園で）

春雷に　吠え掛かりける　小犬かな

春雷の　轟く彼方　雲疾し

新党へ　誘いの電話　青嵐（5．15　細川護熙氏からKSPに電話あり、参議院候補へ丁重な勧誘）

梅雨寒に　臨死体験　語る義母（はは）

（マンションの階段で転び、四〇分間意識不明。この間臨死体験をしたもよう。美しい花園を行くと夭折した長男が現れ、こっちへ来てはいけないと押し戻されたという）

梅雨空に　上棟作業　バングラ人（棟梁の指揮で　鉢巻して働く外国人労働者）

万緑の　底に沈んで　目を閉じる

障害児　付き添う母の　若白髪

奇声出す　子を抱き寄せる母　しわ深し

友もまた　老母を抱え　梅雨の空（熱海市の高橋英典氏と電話す）

老母病み　妻は倒れて　友は老ゆ（同上）

友老いて　昔料亭　今縄のれん（同上）

中研で　同期の友が　梅雨に逝く（六・二七　中国研究所の同期、横浜国大・本橋教授死去）

日本の革命夢見しわが友を　野辺に送りて一人酒飲む

ソの公使　任期を終えて　露に帰る（九一年十二月ソ連邦解体　九二年六月ささやかな送別会）

任期中　国を失くせるソの公使　苦しく笑みて露国に帰る（九二・六・三〇　同上）

●KSP〈両陛下を迎える　九二年七月二日

いまここに両陛下迎う傘の波　サイエンスパーク３周年の朝

（KSP、天皇の地方事情視察の対象施設となる）

天皇の先導役を務めつつ　わが半生の転変を想う

天皇が握手賜える研究員は　昨日ロシアから着きし人なり

研修生の宿舎問われる皇后の　眼差し受けて口ごもるわれ

（研修生の宿舎はなく、一時KSPホテル、のちアパートへ）

両陛下見送りしあと深々と　ソファーに沈みて放心す

●雑詠（俳句で日記）　九二年七～十月

梅雨晴れて　風と畑と　夕焼けと

梅雨晴れて　老後の苦悩　思いやる

夕焼けの　無性に哀し　梅雨晴れや

未婚娘が　三十となる月夜　深酒す

クラシック　想いは青春（はる）の　日に帰る

クラシック　聞きつつ霧の　なかに居り

青春（はる）想う　嶺の頂き　夏残照

炎熱の下界　爽涼の頂上　御嶽山

汗拭きて　空見上げれば　うろこ雲

お地蔵に　何を想うか　イラン人

朝夕に　父母に祈る　歳となる

神社より　お寺の方を　懐かしむ

夕映えに　魂までも　赤くなり

子供らは　子供らの道　処暑の月

この妻の　老後を想う　処暑の月

帰らざる　遠き日想う　峰の風

若き日に　夢見し跡の　草いきれ

山小屋は　新しくなり　遠い夏

●韓国・趙大使親子の案内で雪岳山（ソラクサン）に登る　九二年十一月

イカ釣りの　船煌々と　束草（ソクチョ）沖（束草は日本海岸の港町）

太白に　着けば月星　輝けり

月明に　墨絵のごとき　雪岳山（ソラクサン）

ソラクサン　飴売る媼（おうな）　紅葉映ゆ

峠茶屋　ソラク眺めて　かじかめり

●墓参のため帰郷、富士参りなど　九二年十二月

東（ひんがし）に筑波　小貝（こかい）を眺むれば　吾を育（はぐく）みし大地なりけり

冬枯れてなお美わしき小貝川　洪水の日の遠き思い出

冬枯れの　鬼怒の河原に　節（せつ）想う（石下町に長塚節＜たかし＞の生家を訪ねる）

節（せつ）生家　冷え冷えと冬野に　静まれり

節生家　書斎の陰気　臭きこと

節生家　門前の田は　駐車場

節生家　門前の像の　若き貌（かお）

初乗りの　セルシオ駆って　富士参り（娘婿の運転で富士5合目へ）

冬枯れの　富士の樹海に　霙（みぞれ）降る

雲晴れて　雪の頂　富士白し

妖雲は　かくのごときか　富士隠す

昼休み工事現場のイラン人　寒風に寝て青空（そら）仰ぐ

哲学者のごとき顔したイラン人　工事現場に静座して休む

筑波山五合目以上は雲のなか　冷害の田圃に顔そらすごと

鬼怒川のほとりに働くバングラ人　節（たかし）が見れば何想うらん

（長塚節は小説『土』の作家、歌人。鬼怒川のほとりに生家がある）

白菊の花に埋もれし館長に　案内されし日有難き日よ

（神奈川近代文学館・小田切進館長のお通夜にゆく、桐ケ谷葬祭場）

館長のお通夜かくあれ一人ずつ　白菊ささげ寒夜に帰る

六十を過ぎてもいまだ悩むわれ　親子離れはかくも難きか

●佐藤昇さん死す　九三年三月二十日

十九日朝十時、KSPに着くと間もなく安東仁兵衛さんから電話「今朝九時、佐藤さん死去」と。愕然とし、直ちに水戸への弔問を準備する。佐藤さんは東京外語英米卒、戦時中新聞記者、治安維持法で検挙、戦後出獄して評論活動。丸山真男さんも一目置いていた。五十年代の構造改革派の代表的論客。私も思想的、理論的影響を受けた。

早春の水戸の駅頭われ待てば　喪服の子息小走りて来る

（医者になった長男俊吾君は水戸で医院を開いていた）

春の陽を浴びし新居も空しかり　佐藤昇はすでにはやなし

（医院の隣に新築したばかりの夫妻の新居だったが・・・）

「佐藤さん！　久保ですよ」と言いしまま　涙溢れて遺体を拝す

肺手術終えしばかりのスミ夫人　さきに逝きたかりしと涙にくるる

●義父母の介護・告別　九三年四月～九四年一月

わが娘に花愛でるこころありやと　真剣に問う卒寿翁

おうおうとただ呻くだけわが義母（はは）よ　病室暗く花冷えの朝

（義母は脳梗塞で言語障害があった）

老親の介護に明け暮れ忘れたり　今日はわれらが結婚記念日

電話中突如応答途絶えたり　義父（ちち）を案じて世田谷に疾ぶ

（八月十四日夕方）

応答（こたえ）なき義父（ちち）を案じてこじ入れば　玄関前に倒れてありき

救急車運び込まれし病院は　義母（はは）寝たきりの病院なりき

死に近き義父の独語はシベリアの　極寒の地のつらきことども

「生きて帰れて夢のよう」と　五十年前を喜ぶ死に近き義父

ぜえぜえと苦しむ義父の口開けて　たまりし痰をとるぞ哀しき

この部屋に利也が迎えに来ていると　何度も呟く死に近き義父

（東大卒の自慢の息子だったが三年前大動脈瘤で急死した次男）

あらたまの年に背を向けわが義父は　大晦日の朝一人旅立つ

卒寿まで一月残しわが義父は　眠るがごとく人生を閉ず

死に臨むわが義父の顔仏なり　孫ら案じて菩薩のごとし

●人生晩夏に入る（知事の引退、友のがん告知など）九四年三月～九七年四月

老いるとはかくも切なく哀しきか　ファミリーレストランで一人飯（いい）食（は）む

新しきマンション一目気に入るも　己が余命を思いて迷う（港北ニュータウンにて）

ようやくに寝息立てたる妻の顔　観音のごとくわれには見ゆる

人生の重き荷物を背負い来て　一回り小さく妻は寝めり

十六年苦楽を共にせし知事は　いま密やかに引退を決す（九四年十月）

引退を決せし知事は目を閉じて　一息ふかく長く呼吸す

知事室を辞しつつ想う初登庁の　遠きどよめき夢のごとくに

（一九年前の七五年四月、長洲さん五四、われ四四歳だった）

自治体の先陣切って走り来し　長洲県政にわれも悔いなし

（情報公開、環境アセス、民際外交、頭脳センター構想、KSP 建設 etc）

県庁の古き庁舎を振り返り　振り返りつつ別れをつげる

さまざまの不幸はあれど嘆くまじ　息災にて迎う珊瑚婚われら

父母（ちちはは）がわれら二人を守りしか　風邪傷程度で三十五年過ぐ

息災の身なれば子らを導かん　わが父母のこころ生かして

父母にすがりて不幸払わんと　もがき喘げど応えたまわず

六十路（むそじ）過ぎ恋しさ募る父母は　いまもわれらを見守りてあるか

還らざる　青春（はる）を恋いつつ　花吹雪

花吹雪　わが死に場所は　いずこなる

夜桜を　妻と眺めて　花冷える

花吹雪　見つめる先に　義母（はは）の顔

花冷えの　夜桜悲し　義母の顔

花吹雪　浴びつつ哀し　六十路越え

癌告げる　友は寒夜に　凛として（親友の安東仁兵衛＊さんから肺がんの知らせ）

＊旧制水戸高、東大法退学処分、『現代の理論』主宰、革新運動の戦略家

七時間の　手術に耐えし友　富士白し

富士寒く　病室の友　儒者のごと

春宵や　抗がん剤拒むと　友のTel

春宵や　昆明にまでいく　癌の友（同じころ、県庁のS君は最後漢方に頼る）

電話して　さて慰めの　言葉冷え

癌の友　いつもの声で　花霞

誤診疑う　友に構わず　花吹雪

春宵や　初孫の声　初電話

●住居改築のため世田谷に転居　九七年五月二十五日

緑滲（し）む　驟雨三度びや　転居の日

家財なき　部屋より眺む　あじさい花

敬礼ひとつ　旧居離れる　梅雨のなか

妻還暦　われ六十路越え　梅雨きたる

梅雨晴れし　富士霊園の　あじさい花

梅雨晴れや　生き方変えん　六十路坂

仮住まい　夏を過ごして　秋の雲

世田谷に　夏を暮らして　去り難き

ここに死す　老親にわが身　重ねけり

新築の　秋の陽ざしに　はしゃぐ妻

（九七年十月十三日）

新宅に　帰り吠え声　戻る犬

一つずつ　歯欠ける秋や　六十路越え

新築の　庭に早くも　秋の草

新築の夢　床の間と　書斎の間

●安東仁兵衛さん、がんに斃れる　九七年十月

（愛称は安仁、旧制水戸高、東大法、学生運動で退学処分。多彩な政治運動歴。のち長洲さんに見込まれ『現代の理論』編集長。堤清二氏の親友）

降霜や　癌の転移を　告げる友

夕焼けや　死期を悟れる　友の声（「死後はすべて無か、淋しいな」といって黙る）

茜雲　カラス気楽に　西へ飛ぶ

「桜は無理」と　不意に涙の　友の妻

（九八年三月末―四月十三日）

癌の友　最後の花を　見つめおり

「桜は無理」を　越えて涙す　友の妻

癌の友　点滴引いて　花を見る

癌の友　電話にも出ず　花終わる

夜桜や　病友想い　酒飲めず

夜桜に　半月懸かる　多摩堤

満開の　花を見上げる　老夫婦

深大寺　植木市にも　花吹雪

●弔詩　安仁に捧げる　九八・四・三〇

眼を閉じると安仁の貌（かお）が見える
眼を開けると安仁の姿が見える
いつまでも　どこまでも
安仁は僕を離れない

僕は眼を閉じて想い起こす
僕らが生きてきた長い年月を
光と影に満ち満ちた
三分の二世紀を
とりわけて今　僕は想い出す
共に駆け抜けてきた
戦後五十年の疾風怒涛の日々を
　激しく論じ合った革命への夢
　命がけで闘い　ふかく傷ついた日々
　共に慰めあった失意と絶望の日々
　共に誓い合った構造改革政権樹立への決意

そしてまた想い出す
僕らが離れ難い友となった
あの日のことを
僕らは意見の違いから
しばしば袂を分かったが
神奈川に長洲県政を樹立した時から
もう二度とケンカ別れはしまいと
誓い合った
それは小田急線小駅の
ションベン臭いホームの

ペンキの剥げ落ちたベンチの上だった
僕らを冷たい夜霧が包んでいた

あれからでも　もう二十三年
こんなに長く　こんなに親密だった友は
安仁以外にない
ケンカッ早く　人見知りの激しい安仁と
ケンカは遅いが　人見知りでは人後に落ちない僕が
こんなに長く交友できたのは何故か
おそらく共に　メシよりも何よりも
革命とか変革というものが
好きだったからだろう

いかめしいもの　勿体ぶったもの
官僚的なもの　抑圧的なもの
総じて権力的なものへの体質的反発という点で
共通のものがあったからだろう

だが　安仁のY談には
とても太刀打ちできなかった
Y談のボキャブラリィの極端に貧しい僕は
いつも守勢に立たされながら
必死に想像力をかきたてていた
僕がうかぬ顔をしていると
「クボちゃんはカマトトか」
と言ってカラカラと笑った

だが安仁よ　想い起こしてくれ
小田急線小駅の

冷たい夜霧に誓った通り
人口八百三十万の神奈川に
GDP三千億ドル　韓国　オーストラリア並みのGDPを持つ神奈川に
構造改革政権を樹立し
二十年間持続したことは
紛れもない事実なのだ

地方　地域が新しい意味を持ち始めた時代に
　その先駆けとなった
日本で最も高い知的道徳的ヘゲモニーを持った政治権力が
神奈川で二十年間続いたという事実は
僕らの人生で重い意味を持つ
構造改革政権の樹立という夢は
首都圏のど真ん中で実現したのだ　安仁よ
小田急線小駅の夜霧への誓いを
僕らは果たしたのだ

僕はこの点でも安仁に感謝する
安仁との出会いがなければ
長洲さんとの出会いはなく
長洲さんとの出会いがなければ
神奈川県政への参画もなかった
そして　僕らの人生は
もっと単調なものに終わっていただろう
僕らの交友も遥かに散文的なものだったろう

今日　僕は渋谷のコックドールで
一人で昼飯を食べた
ここは　安仁と僕が何十回となく

夕食を食べたところだ
五階の三省堂で待ち合わせ
四階のコックドールで
三千円のディナーをとるのが
いつものコースだった
小さな卓上ランプに照らされながら
ビールとワインで程よく酩酊しながら
僕らはしばし至福の時を持った

だが　三省堂でいくら待っても
安仁はもう二度と現れない
コックドールの卓上ランプが
いかにゆらめいても
安仁がトイレから戻ってくることはない
何という　寂しさ
何という　空しさか

僕はもう　二度と
コックドールには行かない

●アジアサイエンスパー協会大会で会長に推される　九八年十月

KSP の提唱で九七年十二月、KSP で開催したアジアサイエンスパーク交流会議。集まったのは日本（KSP、京都リサーチパーク、つくば支援センター）中国（瀋陽高新技術産業開発区）韓国（大邱テクノパーク）台湾（新竹科技園区）など八パーク。これが縁でアジアサイエンスパーク協会（Asian Science Park Association）が設立され、私が初代会長に推された。今は二十七か国、七十余りのサイエンスパークに拡大。国連の諮問組織に指定。

瀋陽の空にバルーン高々と　アジアサイエンスパークの大会を祝す

瀋陽高新区二十一世紀大厦華やげり　国際会議場にアジア勢集う

（会場の瀋陽高新技術産業開発区は４０平方キロ、KSP は５．５ｈａ）

北朝鮮ベトナムインドも参加して　アジアサイエンスパークの熱気高まる

理事会にて会長に選ばれ挨拶す　中韓台のひときわの拍手

中韓台のこの友情は忘れまじ　握手交わして胸熱くなる

●深大寺公園に遊ぶ　九八年十二月

心病む　友を訪ねて　深大寺（公園も含め、深大寺は心休まる）

冬枯れの　野に霜柱　ザクザクと

古希迎う心は哀し人の世の　人の定めのかくも儚き（逝きし安仁を想いて）

古希迎う心は哀し吾子ふたり　いまだ己の意に沿わざれば

冬枯れの武蔵野に佇ち越し方を　省みすれば古希の重さよ

冬枯れの武蔵野越えて透き通る　空を仰げば古希何するものぞ

●長洲前知事七九歳で逝く　九九年五月

胸騒ぎ書斎に入れば電話あり　長洲前知事いま黄泉（よみ）に旅立つ

会食を約束したる花まつり　未明に倒れ長洲帰らず（四月八日、会食の予定だった）

長洲知事と苦楽分かちし十六年　わが人生の輝けるとき

密葬の棺に花を埋めながら　この死のいかに重きかを知る

長洲知事の和顔愛語の数々を　いま噛みしめてコメントを書く

鎌倉の墓前に座して耳澄まし　長洲一二の声聞こゆるを待つ

長洲さん黄泉に旅立つ（九九年五月八日）

五月四日の深夜　長洲さんは遠い国へ
一人で旅立っていった
倒れてから一ヶ月　無言のまま　旅立っていった
旅立ちの夜は　激しい雨だったが
旅の途中　ちょうど一休みしている頃の　明けがた
雨はやんで　東が赤く染まっていた

二十四年前　長洲さんは　萌える新緑のなか
県庁前広場に集まった１０００人を前に
両手を　高々とあげて　戦後初の革新知事として
颯爽と登庁したが
いままた　同じ新緑のなかを　両手をあげて
颯爽と　黄泉（よみ）の国へと　旅立っていった

二十年間　全力投球し　完全燃焼した　長洲さんは
思い残すことが　無かったかのように　死においても
なぜか　颯爽としている

（人生八〇年、人生七掛け説を唱えた長洲さんの享年は、七十九歳だった）

Ⅲ・白秋から玄冬へ

目次

古希を迎える　九九年六月七日
KSP 社長退任　川崎市産業振興財団へ　九九年六月
北京で建国五十周年を祝う　九九年十月
新世紀、新千年紀を迎える　二〇〇〇年一月
神奈川県日本中国友好協会会長に就任　〇〇年五月
ブッシュ「テロとの戦い」始める　〇一年十月
妻の眼底出血に慌てる　〇一年十二月
政権交代、東日本大震災、原発事故、日中逆転など　〇三年～十七年
妻の闘病を支える　二〇一二年一月～一八年六月
緩和ケア病棟で闘病、臨終した妻の枕頭で詠める歌　一八年六月
断章―臨終近き日々の妻の言葉メモ　一八年五～六月

プロフィール

古希を迎え、白秋の思いが深まる。この時期、長洲一二、安東仁兵衛、佐藤昇、芝寛、篠原一、松下圭一、棚橋泰助、伊藤茂、加藤宣幸さんはじめ多くの先輩、同志、友人、知人の訃報が届くようになった。とりわけ５８年間苦楽を共にしてきた妻を亡くしたことは、玄冬への想いを一段と深いものにした。

●古希を迎える　九九年六月七日

七〇年を生きて想う

はやくもと言うべきか
ようやくと言うべきか
今日私は７０歳の誕生日を迎えた
長い旅路を越えてきたような
あっという間に過ぎてきた人生だったような
定めがたい心のゆらめきがある

しかし　まず心に湧きあがる思いは
七十年も息災で生きてこられたと言う事実
七十歳の今日まで現役で仕事を続けてこられたと言う事実
研究者　公務員　経営者という三段跳びの人生を
七転八倒しながらも
思いっ切り駆け抜け来られたと言う事実
この事実への深い感謝と感動である

振り返れば　遠い少年の日
戦争に次ぐ戦争の苛酷な日々
戦後　飢餓と窮乏と混乱の時代
人生の出発点を作ってくれた２人の教師がいた
進学率４％の時代　旧制中学(今の高校)に進学させよと
父親説得に日参した小学校教諭
敗戦後　大学進学を父に説得しに来た英語教師

肯定も否定もせずにただ微笑んでいた父
この二人の教師の説得と父の黙認
この３人がいなかったら　私の今日はなかった

この３人が私の一生の出発点を作ってくれた

思い返せば　長い人生の中で
自分の意志を通したのはただ一度
英語教師の官僚コースの勧めを振り切って
東京外語中国科に入ったことだけだった
エドガー・スノーの『中国の赤い星』が私の進路を決めたのだ
だが　そこまでとそこから先はすべて恩師　友人　知人　先輩が
頼みもしないうちに次々に用意してくれた道を歩いてきた

最初の就職先だった中国研究所は一年先輩の勧めだった
労働問題の研究所も請われて入った
取手町議も３か月口説かれた末だった
四四歳で神奈川県庁に入ったのは長洲知事の要請だった
KSP 社長は長洲知事の命令
神奈川日中会長は総会での選出
川崎市産業振興財団理事長は高橋市長の説得による
皆に生かされてきた生涯だったと　今しみじみ思う
次々にその顔と名前が浮かぶ

そして　次に湧きあがる想いは
茨城の片田舎の貧しい家に生まれた私が
なぜこんなに稀有な人生を
生きてこられたのかという想いだ
それは恐らくすでに亡き親兄弟や縁者たちの
果たせなかったいくつもの人生を
私が托されて生きてきたからだろう
そんな想いで胸一杯になる

底冷えのする日　稲刈りから帰ったまま庭で倒れた四十二歳の母
二十二歳で戦死した戦車兵の兄
八年の中国転戦で青春をなくして死んだもう一人の兄
横浜空襲で焼け出され　五十歳で病死した姉
劇団を起こしたが　二度も挫折し　四十歳で事故死した弟
その夢や希望やあるべかりし余生を
すべて私が托されて
生きてきたからではないのか

そうでなければこんなに長く
こんなに息災で
こんなに大事な仕事に
つぎつぎにめぐり合えるなんて
あり得ないことだ

古希を迎えた今日
私は改めて心に刻む
私を生かしてきてくれた
親兄弟　恩師　友人　先輩　妻の親兄弟
すべての人びとの思いに応え
志半ばで散っていった
人たちの分も引きうけて
命の限り働き続けることを
まだ六十路に入ったばかりの妻とともに
いま改めて心に誓う

●KSP 社長退任、川崎市産業振興財団へ　九九年六月二十二日

初の常勤社長として四期八年、「KSP を軌道に乗せてほしい」との知事の特命を何とか果たし終えた。四五００人の研究者、技術者を集積し、地域イノベーションセンターの地歩を固め、一一七社のベンチャー企業を起ち上げ、インキュベータを軌道に乗せた。アジア有数のサイエンスパークとなり、国の内外から数万の見学者を迎え、両陛下のご視察もいただいた。第三セクターとして初めて黒字決算して任期を終えた。その日、長洲さんから「久保君有難う」の電話が入った。挨拶に伺った高橋市長からは突然の要請。

日本初のサイエンスパーク起ち上げて　われは悔いなくこの地去るなり

企業経営に縁なきわれと思いしが　使命感にて走り来し日々

八年を過ごせし社屋振り返り　古希の峠を上り行くわれ

八年は長き歳月わが秘書も　三十路を過ぎて四十路に入る

退任の挨拶せるにメーヤーは　次の仕事へ勧奨しきり

（退任の挨拶をしたその場で、高橋市長から川崎市産業振興財団理事長に要請される）

社に戻り一服せるわれ訪ねきて　回答せまる助役の迫力

古希迎えなお理事長が勤まるか　窓外の雲静かにながる

助役氏に受諾を告げて電話置き　今日一日のドラマを想う

引退にこころ定めしこのわれに　川崎市長の召集令状来る

テクノピア人混みに揉まれ行くわれを　OLらすいすい追い越してゆく

（十数年の車付生活で足腰弱りしせいか、愕然とする）

理事長の椅子に座りて手を握り　「よし　もう一仕事」とテーブル叩く

●北京にて建国五〇年を祝う　九九年十月

半世紀　北京秋天　国慶節（南村志郎夫妻の招きで妻と北京に行き、建国五十年を祝う）

中国に心定めて五十年　国慶北京で古希祝すわれ

天安門に五十万の民パレードし　巨龍激しく離陸せんとす

国慶の花火の宴延々と　北京の夜空裂けんばかりに

兄たちは中国と戦いこのわれは　半世紀経て国慶を賀す

白雲に　紅葉の山　照り返る（横浜・寺家にて）

紅葉が　身に染みてくる　金閣寺（京都一泊）

●新世紀、新千年紀を迎える　二〇〇〇年一月

千年紀　丘に登りて　初日待つ

新世紀　新千年紀　初日の出

紅梅の　一輪咲きし　今朝の霜

老妻の　ガーデニングに　春ひかる

霜柱　除けて葱菜を　収穫す

初詣　あと何回の　初詣

静けさや　耳順の朝に　積もる雪

生きる意志　耳順の寒に　血圧計

夢に見る　父の享年に　われ近く

タカオガンバレヨ　亡きおふくろの声　梅林

梅の香に　ふと年忘れ　華やげり

夫送る　姉の横顔　寒椿

花一分　古寺にまだ　冬残る

おぼろ空　富士も霞みて　花三分

ガーデニング　花満開の庭　妻若し

花七分　先ゆく女　なまめかし

厚着して　夜桜ながめ　華やげず

鎌倉に　梅桃桜　一沙鴎忌（一沙鴎は長洲前知事の雅号）

●神奈川県日中友好協会会長に就任　二〇〇〇年五月

日中の友好願い起ち上げし　長洲の心我は引き継ぐ

日中の友好説きしわれ咎（とが）め　「国賊なり」と葉書舞い込む

日中の友好を賀す懇親会　百名集いて熱気高まる

薄給にめげず働く事務局の　この人々の意気に応えん

梅雨晴れて県庁表敬す遼寧の　若き省長顔輝けり

（薄熙来省長、数々の業績あるも、のち重慶市党書記時代解任される）

指名受け老朋友の座に着けば　亡き長洲知事の面影浮かぶ

名札見て座りてみれば両隣　名の通りたる財界大物

（遼寧省との友好提携に尽力した老朋友を大切にする中国の礼節）

精悍緻密新省長の言動に　躍進中国の息吹溢れる

●「テロとの戦い」始まる　二〇〇一年十月

摩天楼に突き刺さり行くジャンボ機は　世界の矛盾突き刺すがごと

テロは憎し恐ろし蛮行なり　されど憎しみ生みしは何ぞ

テロは犯罪　戦争に非ず　アフガン空爆は違法なるぞブッシュ

空爆の費用そのままアフガンの　援助に充てればテロ熄（や）むものを

八甲田寒夜に輝く星空は　少年の日の星空に似る

（超佑鎮君とご両親の招きで　妻とともに奥入瀬　八幡平　十和田湖　弘前に遊ぶ）

岩木山近く眺めるその姿　神の宿れる山にも見ゆる

●川崎市産業振興財団退任、妻の眼底出血など　〇一年十二月

古希過ぎて保守派市長に仕える苦労　心ひそかに引退を決す

（雑誌『正論』新年号の市長インタビュー記事を読んで）

側近に耳貸さぬ前市長は固陋（ころう）なり　単騎出馬しすべて失う

美濃部飛鳥田長洲とも引退の時期誤れり　権力病に保革はなきか

二十年わが髪刈りし理髪師は　脳梗塞にて手足動かず

「都合により閉店」と張り紙出せる理髪店　師走の街の小さなドラマ

喜寿翁が中国三千キロ踏破して　もはや途上国に非ずと断ず

（横浜日中友好協会パーティーでYさんと会う）

南北の朝鮮統一ならざれば　北東亜の平和はなしと喜寿翁が説く

豆満江の開発に必要と喜寿翁は　ロシア語学ぶ喜び語る

眼底に出血せる妻伴いて　眼科救急に心せくわれ（〇二年三月二十六日）

長年の苦労かけたる妻なれば　検査室の前に粛然と佇つ

老いるとは緩慢なる拷問か　眼と歯に続き脚力落ちる

陸軍の看護婦なりしわが姉は　戦後はなんと米軍病院

（船の都合で中国戦線に行けず、命拾いした姉も間もなく米寿という）

トッパンでレッドパージの弟は　何故かいつしか地方銀行

（銀行務めの傍ら俳句の会を主宰していたが、七四歳で逝った）

劇団も釣り道具店もままならず　失意のうちに事故死せる末弟よ

（四歳のとき母の葬儀で集まった人に喜び、歌を唱い涙を誘っていた）

●政権交代、東日本大震災、原発事故、日中逆転など　〇三年～十七年

ロシア語の外語の友の訃報次ぐ　ロシア民謡歌いし仲間

（新読書社長の伊集院俊隆、元東外大教授飯田規和君ら）

富士霊園花爛漫の春の日に　名和家（妻の実家）の墓に久闊を叙す

こんなこと滅多にないぞ投票日　長蛇の列は政変の予感

（二〇〇九年八月三〇日投票、民主党圧勝、政権交代）

民主党政権取りしその夜は　妻と二人でステーキ食らう

加藤さん竹中君らわが友よ　日吉で挙げる乾杯の至福

（メルマガ・オルタ主宰の加藤宣幸さん、元江田ブレーンの竹中一雄さん）

「わが同志」と呼ばれて十年若返る　県日中の若き事務員

（神奈川県日中友好協会。事務員は低賃金のボランティア）

中国へ上から目線いつまでか　中国すでに日本追い越す

（二〇一〇年、GDPで中国日本を抜き、世界二位へ）

中韓へ小役人根性の日本人　歴史認識国の命（いのち）ぞ

（日本の侵略を百年は忘れないと鄧小平は言った。朝鮮植民地化も同じだ）

わが論文中国誌に載りたるは　がん病む友の翻訳なりき

（会員配布の雑誌『領導者』に二回ほど論文が載った）

反中の嵐に抗し弁ずれば　「目からうろこ」と聴衆の声

（某市民講座で「様変わりする世界の中の日本と中国」を話す）

三一一この大揺れにビル群軋み　悲鳴上げつつ人逃げ惑う

（川崎市産業興財団のあるビル群の前で大震災に遭う）

ビル群より飛び出せし人ビル前の　広場を埋めて身動きできず

三一一電車は不通川崎より　徒歩にて日吉二十三時着く

フクシマの原発メルトダウンせば　関東一円人は住めざり

（三月十三日、深刻事態に陥る）

菅直人宰相にあらず活動家　公約破棄で政権潰す

百薬の長なり毎日ウオーキング　妻との歩距離日々に広がる

大教室企業家精神説くわれの　受講者すべて孫の年齢

（十七年十一月八日、多摩大趙教授の依頼で「地方自治の理念と実践」で特別講義）

KSP 創立三十周年で挨拶す　長洲精神改めて説く

（二〇一六年十二月、KSP ホールにて）

これもまた健康長寿の功徳なり　三十周年祝賀の乾杯の音頭

●妻の闘病を支える　二〇一二年一月～一八年六月

寒中の要精検からがん告知　妻より我の驚き重し

（二〇一二年一月六日横浜市の定期検診で要精検、一〇日東邦大大森で精検、一二日告知）

この日をば我は忘れじがん告知　妻振り返り我をば見詰む

帰り道妻の肩抱き我おれば　君の闘病大船の上と

手術の日芦屋より飛び來しわが娘　妻喜びて涙うっすら

（二月十一日入院、十三日オペ）

手術室開ければ八人整列し　妻を迎える一礼しつつ

麻酔より覚めたる妻は清々し　もう済んだのと辺り見回す

病室に妻を見舞えば立ち上がり　今日退院と自分で決める

車乗り運転続ける我が妻は　がんのことなど忘れたるごと

（二月二十一日退院、一週間後に車運転）

乳腺外科通いなれたる席なれば　髪なき人のおのずと見ゆる

X線治療の朝は六時半　家を出ずるも苦とは思わず

採尿採血点滴と　化学療法に耐えていく妻

点滴の終わるを待つ間この我は　流れる雲を見つめ続ける

マーカーが正常に戻れる結果みて　手を取り合って喜ぶ我ら

がんの本二十数冊読み込んで　がん治療の「権威者」となる我

林檎人参ジュースにし　朝夕捧ぐ祈るがごとく

がんの本見向きもせずに我が妻は　「お任せします」と鼻歌交じり

スーパーで品定めする妻みれば　がんの憂いは薄れゆくなり

鎌倉山ウオーキング止めて幾月ぞ　似たところあり港北歩く

綱島や日吉に続き港北も　なじみの店の閉店続く

病む妻はなじみの店の閉店を　わがことのよう憂いて沈む

がんセンターセカンド・オピニオン不毛なり　三万取りて何ら益なし

トリプル・ネガはあきらめよと　言わんばかりの非礼なる医師

患者には医師の言葉は治療なり　その一言が患者追い詰む

林檎人参に蕪加え　祈り込めつつジュースに精出す

慶応のキャンパス歩くその途中　背中痛みて妻うずくまる

急ぎ足家に帰りて鎮痛剤　そのままソファーにうつ伏せとなる

マーカーが異常に高きその夜は　言葉少なく夕食終わる

（二〇一七年四月三日、マーカー急上昇）

PET 検査結果を見れば黒々と　転移の箇所がいくつか見ゆる

再びのX線治療痛みやむ　線量これで限界なりと

化学剤耐性できて効き目無し　他剤に変えても苦しむのみか

寒い日の告知の日よりはや六年　回復期待は幻なるか

かくなるはがんと共存目指すのみ　妻を励まし我も決意す

東邦の大森に通いて早六年　体力弱りて通院は無理

（東邦大大森病院には電車、バスで一時間以上かかった）

胸膜に転移し胸水溜まりせば　酸素吸入不可欠となる

（二〇一八年四月一七日、医師より酸素吸入の指示あり、翌日ボンベ到着、妻拒否反応）

転移して酸素吸入付けしより　妻の落ち込み大きかりけり

深夜二時苦しむ妻を娘らと　井田病院の救急へ急ぐ

（二〇一八年五月二十二日深夜、娘の車で川崎市立井田病院の救急へ）

入院し緩和ケア病棟心地よし　妻もしばしの安らぎ見ゆる

（井田病院の緩和ケア病棟はレベルが高かった）

朝娘午後我当番付き添いの　病院通いに心落ち着く

●緩和ケア病棟で闘病・臨終した妻の枕頭で詠める歌　二〇一八年六月

死に近き妻を看取りつ想い出ず　小川にしじみ取る小３の彼女

死に近き老妻の顔いと愛（いと）し　８０年生きししわの深さよ

死に近きことも忘れて語り次ぐ　教師時代の楽しきことども

初孫が高校教師になりたる日　小躍りしたる妻の輝き

人体の詳しき知識披露する　小６の孫娘（こ）に目を丸くする妻

ハイタッチする小４の孫娘　心癒され手を合わす妻

緑濃きサンルームの風景愛でる妻　森の向こうの我が家恋いつつ

「死にたいよ　死なせてよ」とせがむ妻　なすすべもなくただ胸さする

「長い間有難う　元気でね」と　わが手握りて絞り出す言葉

若菜（娘）呼び思いのたけを語りし夜　老妻は逝けり心おきなく

死に近き夜はしんしんと更け行けり　妻の寝顔を幾たび撫でる

朝明けの臨終の妻抱きしめば　まだほのかなる体温残る

（朝六時過ぎ、病院からの呼び出し、娘らと急行するも意識なし）

臨終の妻の寝顔に駆けめぐる　この闘病の幾星霜

老妻の遺体にすがり泣く子らの　姿は悲し妻の臨終

「穏やかな最期でした」と言いし看護師（ひと）目を赤くして我が身気遣う

医師ナース勢ぞろいして妻送る　井田病院の緑も黙す

●断章―臨終近き日々の妻の言葉メモ　二〇一八年五～六月

人生の最後に重い病気になり、口惜しさ一杯ですが、いい先生、いい看護師に出会い、最後にいい病院に入れてもらい、毎日見舞いに来てもらってとても幸せです。あなたは高齢なのに毎日元気で介護してくれたのが何よりうれしかった。８歳も違うのだから、本当は私があなたの面倒を見なければいけないのに、逆になってしまい本当に申し訳ない。ごめんなさいね。

若菜（娘）も毎朝来てくれて本当によく世話してくれた。いつも感謝している。あの孫たちは私の宝だよ。どれだけ慰められたかしれない。特にさきが教師の道を選んで見事都立高校の教師になったことは、後継者ができたようで本当にうれしい。さや、さらも素晴らしい子供たちだが、将来の姿が見られないのが何とも残念だ。

教師時代は楽しかった。本当になつかしい。下妻小学校、山王中学校。一人一人の顔が浮かぶよ。みんないい子たちだった。みんな私をしたってくれた。最近も何人か会いたいといってきたのに、体調が悪く断ってしまったのが残念でならない。みんなどうしているかなあ。一緒に働いた先生たちも皆懐かしいよ。

綱島住宅の時、近所の父兄から頼まれて子供を預かり、ついでに勉強も見てやったらどんどん成績が上がった。それが評判になって生徒がどんどん増えた。あれには我ながら驚いたよ。少し離れた日吉に移ってからも皆やめずに来てくれたね。一人女優になった子がいたね。あの頃はすごく忙しかったが楽しかった。

私の母は早くから（旧制中学時代から）あなたを見込んでいたよ。「孝雄君はただものじゃない。必ずひとかどの人間になる」と言っていた。この母の見立ては正しかったんじゃないの。だから沢山あった縁談を全部断り、あなたが現れるのを心待ちしていたようだった。だから数年ぶりであなたが兄の線香あげに来てくれた時の母の喜びようは異常なほどだった。

教育大在学中、２０歳で事故で亡くなった長男の面影を、親友だったあなたに求めていたのかもしれない。終戦の少し前、父を残して満州からの引き上げ、戦後夫の生死も不明の中で女手一つで４人の子供を育てようと農業までして苦労した母を思うと涙がでる。そんな母を兄たちと一緒の支えてくれたのがあなただった。次兄（法政二高教師）が急死（大動脈瘤）したこともあって、両親の最後を十分見てやれなかったことが私の一番の心残り

だ。でも経堂の病院に横浜から毎日通ったね。車の免許取ったのも母のためだった。

振り返ってみると、二人とも裸一貫で取手に所帯を持って、８年後取手を出て東京にも横濱にも近い日吉に家を建て、２人の子供を大学にも上げた。よくぞここまできたものだと思うよ。取手を出て横浜に来た決断は正しかったし、そのごはすべて良い方向に動いてきたね。質素な暮らしだったが、生活に困ったことは一度もなかった。明日は必ず良くなると信じ、事実そうなってきた。

あなたは取手では議員に担がれ、綱島住宅では自治会長や管理組合長、興人住宅でも建築協定委員長になるなどどこでもリーダーに担がれ、立派にやってきたね。私はお手伝いで大変だったがやり甲斐があったね。近所の人たちも皆協力してくれた。そればかりかあなたは神奈川県の副知事、神奈川サイエンスパークの社長、神奈川県日中友好協会の会長、川崎市産業振興財団の理事長など、大きな仕事をどれも立派にやり遂げてきたんじゃない。もっと誇りを持っていいのよ。地方自治や国際関係の本だってもっと書けるでしょ。

（注）この項は割引して読んでください。元気なころ私への妻の評価は常に辛口でした。これが本音ならうれしいのですが・・（孝雄）

私はもう十分生きたし、やることはみんなやったから悔いはないよ。早くおばあちゃん（妻の母のこと）のところへ行ってゆっくり休みたい。長い間本当にお世話になりました。どうも有難う。いつまでもみんな元気でね。

（２０１８年６月３０日　久保孝雄記）

プロフィール

久保　孝雄（くぼ　たかお）

・１９２９年　茨城県生まれ　東京外国語大学中国語学科卒業
・１９４９～７４年　（社）中国研究所調査部員　労働調査協議会研究員、事務局長、調査研究部長など
・１９７５～９１年　長洲知事に請われ政策スタッフ（特別補佐官）として神奈川県庁に入る　県参事　県理事を経て副知事（８７－９１）
・１９９１～９９年　日本初のサイエンスパーク「かながわサイエンスパーク」の運営会社（株）ケイエスピー（国、県、川崎市、民間企業の共同出資＝４５億円）代表取締役社長に就任　在任中１１７社のベンチャー企業を育成
・１９９９～０６年　川崎市産業振興財団理事長　兼新産業政策研究所長　顧問
・２０００～１２年　神奈川県日本中国友好協会会長　現在名誉顧問
・２００６～０８年　NPO 法人・産業環境創造リエゾンセンター理事長
・２００６～１０年　参加型システム研究所理事長
・２０１８年 12 月　日中中小企業交流支援協会名誉会長

（国際関係）
・県庁時代「民際外交」を担当（米国・メリーランド州　中国・遼寧省　ウクライナ共和国・オデッサ州　ドイツ・バーデンビュルテンベルグ州　韓国・京畿道と神奈川県との友好提携に尽力）
・アジアサイエンスパーク協会（ＡＳＰＡ）を創立　初代会長（００－０４　０５以降は名誉会長）中国・韓国・台湾のサイエンスパーク顧問（いずれも９６－０６）

（大学関係）
東京農業大学　青森公立大学非常勤講師（地域経済論、サイエンスパーク論、起業論など）中国（瀋陽）・東北大学顧問

（政府関係）
中央公害対策審議会専門委員　資源調査会委員　科学技術会議専門委員　科学技術庁参与

（受賞）

神奈川県政功労者賞　ASPA 創立者賞　中日友好貢献者賞　韓日友好功労者賞（横浜総領事）

（主な著書）

『市民参加』（現代都市政策講座Ⅱ　共著　岩波書店　７２）

『産業社会の将来』（共著　日本評論社　７３）

『知識経済とサイエンスパーク』（編著　日本評論社　０１）

『政策』（岩波講座・自治体の構想・３　共著　岩波書店　０２）

『知事と補佐官　長洲神奈川県政の20年』（敬文堂　０６）

『東アジア　日本が問われていること』（共著　岩波書店　０７）

『社会変動と社会運動―社会的経済と私たち』（福祉クラブ生活協同組合　０８）

『変わる世界　変われるか日本』（東洋書店　２０１３）

『世界のパワーシフトとアジア』（共著、花伝社　２０１７）

（その他）

『東京新聞』『神奈川新聞』『日本と中国』に連載コラム執筆

雑誌『世界』『現代の理論』『オルタ』などに論文多数